



Title	英語学習におけるスキルの獲得とは 変形生成文法の観点から
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 20, pp.95-104; 1993
Issue Date	1993-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/30177">http://hdl.handle.net/10069/30177</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-20T15:59:37Z

## 英語学習におけるスキルの獲得とは

— 変形生成文法の観点から —

大坪 喜子

(平成4年10月30日受理)

What is an Acquired Skill in Language Learning?

— From a viewpoint of Transformational-Generative Grammar —

OTSUBO, Yoshiko

(Received October 30, 1992)

はじめに

本稿では、われわれが英語を外国語として学習する場合に、英語が使えるようになるとはどういうことであるのか、そして、英語を外国語として教える教師にとって、英語をできるように教えるとはどういう仕事をするものであるのかを、変形生成文法の観点から考えることにする。

言語理論は、それ自体、言語教育と直接的にかかわるわけではない。しかし、言語理論が言語をどのようにとらへ、どのように記述しようとしているのかにより、言語教育がこれまでその影響を受けてきたことは否定できない。たとえば、構造主義言語学 (Structural Linguistics) の影響下で1950年代の外国語教育は口頭練習の重要性を強調し、行動心理学 (Behavioral Psychology) の刺激・反応による学習理論を取り入れ、パンプラクティス (Pattern Practice) を外国語教育に定着させた。パンプラクティスは、外国語をコミュニケーションの手段として指導する場合には欠かすことのできない重要な役割をになう技法となっている。この「刺激・反応」技法 (Stimulus-Response Technique) は、「刺激」として与えられた言語のパターンが「反応」としてどのように作り出されたのかということにより、その学習状況または習得状況を判断することができ、いわば、外側から学習者の言語習得過程をとらえているといえることができる。

しかしながら、構造主義言語学と行動心理学は、いわば、見えるところを手がかりとして言語習得状況を説明することはできるが、言語習得の過程を説明することはできない。言いかえれば、構造主義言語学と行動心理学の産物である「刺激・反応」技法、すなわち、パンプラクティスは、機械的な練習 (rote activity) を通しての習慣形成 (habit formation) を目指しており、学習している外国語のパターンが自動的に口から出てくるようになることだけに終始する。このため、新しく学習する外国語の音声面での習慣形成段

階では、特に、この技法は重要な役割を果たしているが、人間が言語を生成する (generate) ことについては説明できない。人間は、自分の意志を伝えるために言語を創り出すことができる。それは、外から与えられた発話をただまねているのではなく、1回1回、自分で創り出しているのである。構造主義言語学はこの事実を説明することができない。これは、構造主義言語学が、人間が頭の中で言語を創り出す過程に関心がないため、その視野に入っていないことによるものである。構造主義言語学の限界を示していることになる。

これに対して、変形生成文法理論では、人間の言語能力 (Linguistic Competence) にその関心があり、人間には、言語を創り出す生得の能力 (innate ability) が備わっているということを前提とし、人間が頭の中でことばを創り出す過程を仮説として示し、それを文法規則として明示的に示している。以下、本稿では、このような変形生成文法理論の考えかたが言語教育にどのようにかわることができるのかを考える。特に、スキルの獲得に焦点を当てて検討を加えることにする。

## I. 現代語教育の一般的原则

まず、1953年8月にセイロンで開催された UNESCO (United Nations Educational, Scientific, and Cultural Organization) の国際セミナーで、現代語教育についての議論がなされ、その結果まとめられた現代語教育のための基本的な考えかたを示す5項目の一般的原则 (general principles) に言及することからはじめよう。その5項目の原則とは次のとおりである。

- (1) The approach to the teaching of all foreign languages should be primarily oral.
- (2) Active methods of teaching should be used as much as possible.
- (3) The greatest possible use of the foreign language should be made in the classroom.
- (4) The difficulties of the foreign language in the matter of pronunciation, vocabulary, and grammar should be carefully graded for presentation.
- (5) The teaching of a language should enable the students to develop their own skills, rather than provide information about the form of the language.

Robert Dixson (1975: 2)

これらの原則は、およそ40年近く前に示されたものであるが、そのまま、現在も外国語教育の指導法の指針を示すものである。(1)は、まず、音声を重視し、口頭 (oral) により導入すべきであることを述べており、(2)は、指導法について述べたものであるが、従来からの文法・訳読法 (the grammar-translation method) が、教師中心の授業であったことに対するもので、学習者にできるだけ学習している外国語を使う場を与える指導法が用いられるべきであることを述べている。そして、(3)は(2)と呼応して、教室内の運営について、授業では、学習者に学習している外国語を最大限に使わせるようにすべきであることを述べている。(4)では、このように、外国語を使えるように指導するために運用練習を中心に採り入れた指導においては、その外国語の教材は、発音・語彙・文法について難易度に十分配慮して提示する必要があることを述べ、最後に、(5)では、(1)から(4)の原則の背後にあると考えられる現代語教育の基本的な考えかた、すなわち、外国語教育は、単に、その言

語の形式についての情報を提供するのではなく、学習者に彼ら自身のスキル (skill) を伸ばさせるように指導すべきであるということを述べている。教師が、(1)から(4)までの原則を実施することができれば、必然的に(5)は実施されていることになるということができる。

現代語教育に関するこれらの原則は、言語はコミュニケーションの手段として使えるように教えらるべきであることを示している。言いかえれば、1953年の段階で、すでに従来の知識としての外国語学習から、スキルを習得する外国語学習へ移行すべきであることを提言している。それは、世界情勢が大きく変化した第二次大戦後の国際社会の将来を見通してなされたものであったことは容易に想像できることである。

## II. 外国語学習におけるスキルと知識

次に、上記(5)の原則を念頭におきながら、外国語学習におけるスキルと知識について検討を加えることにする。まず、R. Dixon (1975 : 8) に基づいて、スキル (skill) と知識 (knowledge) の定義を示し、その違いを明らかにすることからはじめよう。Dixon は、スキルについて、長い時間をかけて練習を繰り返えしすることをとおしてできた能力であると次のように説明している。

A skill is an ability developed through prolonged practice and repetition. Playing the piano is a skill. Typing is a skill. Such skills, since they must operate almost automatically, take a long time to develop. They require continuous practice and drill. Robert Dixon (1975 : 8)

たとえば、ピアノが弾けるということは、ピアノを弾く練習を繰り返えしすることをとおしてできたスキル (すなわち、能力) である。タイプができるということも、タイプの練習を繰り返えしすることをとおしてできたスキル (能力) である。このようなスキル (能力) は、ほとんど自動的に作動しなければならないため、それらのスキル (能力) が身につくためには長い時間がかかるのである。そのうえ、絶え間ない練習を必要とする。このスキル、すなわち、練習をとおして作り出された能力を外国語学習の場合に置きかえてみると、たとえば、ある英語の文型を繰り返えし練習した結果、文法規則を意識せずに、話し手が自分の伝えたいことを伝えるために、その文型が使われる適切な場面でその文型を自動的に選んで使うことができる能力ということになる。それは、その文型についての文法規則を単に知っているということとは区別される。言いかえれば、繰り返し練習をして、英語の文法規則が意識下の状態にあり、自分の意志を英語で自由に表わすことができるということと、単に英語の文法規則について知っているということとは別のことである。したがって、英語についての知識があることは必ずしもスキルがあることを含意しない。

さらに、同じく Dixon の知識 (a knowledge) についての説明をみてみると、

A knowledge, on the other hand, is a body of information acquired through extensive reading or investigation. Thus we gain a knowledge of history, of philosophy, or of literature through an extended study of these subjects. No particular skills are involved here. Robert Dixon (1975 : 8)

知識 (a knowledge) とは、書物をとおして、また、研究をとおして得られた情報の集大

集大成である。われわれは、歴史や哲学や文学の知識を、それらの領域について書かれた本や、それらの専門分野の研究をとおして得る。しかし、その場合にスキルは含まれていない。言いかえれば、知識を得る仕事とスキルを得る仕事は別の仕事である。ここでも、スキルの場合と同様に、「知識」について外国語学習の場合に置きかえてみると、従来からの「文法・訳読中心の指導法」(the grammar-translation method)は、まさに、「知識」を得るための指導法であったことがわかる。すなわち、英語の文法についての知識を用いて英語で書かれた文学作品などについての知識を得ることをめざす指導法であるからである。日本の英語教育が、何年間英語を勉強しても英語が使えるようにはならないと批難されつづけているのは、スキル中心ではなくて、知識中心の指導法を用いているからであることにすぐに気づくであろう。

したがって、外国語教育において、われわれ英語教師は、まず、このような「スキル」と「知識」の区別をはっきり認識する必要がある。これまで日本の英語教育は、この区別をはっきりと認識しないまま、知識中心の伝統的な方法にのみ依存してきており、「スキル」を求める時代の要請に対応できないままであった。次に示す Dixson (1975 : 8) からの引用文は、伝統的な外国語教育法について述べたものであるが、われわれは、日本の英語教育が今もなおこの伝統的な外国語教育を実施していることを再認識せざるをえないであろう。それは、言うまでもなく、「知識」としての外国語の学習をめざすものである。

Traditionally, foreign languages were considered as subjects for extended study rather than as materials for practice or use. The methods which were employed in teaching mainly followed the methods used in teaching the classical languages, Latin and Greek. Literary subject matter was preferred to colloquial forms. Translation and analysis, through the medium of the mother tongue, was the accepted approach. The student acquired a knowledge of his subject, important for its social and cultural implications, rather than a skill in using the subject matter.  
Robert Dixson (1975 : 8)

すなわち、伝統的な外国語の指導法では、外国語は、練習したり、使ったりする対象ではなく、むしろ、研究の対象であり、したがって、その教育法は古典語(ラテン語・ギリシャ語)を教える場合に用いられた方法にしたがっていた。また、教材は文学的なもののほうが日常用いられる言語材料より好まれ、その翻訳や分析は母国語をとおして行なうことが一般に認められた方法であった。そして、学習者は、学習している外国語のスキルではなく、その外国語についての知識を習得した。その理由は、「スキル」より「知識」を習得することのほうが、社会的・文化的に重視されていたというものである。日本の英語教育の主流は、今もまだこのような伝統的な枠組みの中にあると言えるであろう。中学校・高等学校における文法・訳読中心の授業、そして、大学における英文講読と呼ばれる授業は、この伝統的な外国語教育に沿ったものであることは改めて指摘するまでもないことであろう。

しかし、現在の国際化社会の中での日本の役割を考えると、あまりにも閉ざされた英語教育をしつづけていることに英語教師は気づくべきである。Dixson (1975 : 8) は、つづけて、今日、求められている外国語教育のありかたについて次のように述べている。

Today, as we have already explained, the emphasis has shifted. Because of a general change in world conditions, we now study foreign languages in order to be able to use them in our everyday life. Our aims are immediate and practical. The new approach to language learning, moreover, considers language as a dynamic activity rather than as a body of passive information. We learn to speak by speaking, not by studying abstract grammar forms, reading the classics, or extensive translating. Furthermore, slow, labored speech, the result of translating from the mother tongue, is not acceptable. Language should be spoken freely and easily, even if it is limited in range. It should proceed almost unconsciously from carefully established habits. It should operate, in other words, as an acquired skill.

これは、知識としての外国語の学習ではなく、使うための外国語の学習に変わってきたことを示している。ここで示された外国語学習に対する新しい考えかた、すなわち、言語を動的な活動 (a dynamic activity) としてとらえていることに注目したい。従来の外国語学習は、対象となっている言語についての知識を得ることであったが、外国語を日常生活において用いることばとして学習することは、従来のように母国語で考えて、それを外国語に翻訳して発話をつくり出すというのではなく、もっと直接的・実践的であると考えるのである。たとえば、英語を「話すこと」を学習したければ、実際に英語を話すことによって学習するのである。「書くこと」を学習したければ、実際に英語を書くことによって学習するのである。言語は、そのように、直接的・実践的な練習を繰り返えし行うことをとおして、一つの習得されたスキル (an acquired skill) として作動すべきものであると Dixson はとらえている。

以上、外国語を使えることばとして学習するということは、スキルを獲得することであるということ、そして、そのスキルは、繰り返えし練習を行うことによってできる能力のことであり、単にその外国語についての知識の集大成からは得られないものであるということを示したことになる。この繰り返えし練習を行って獲得されたスキルは、言語理論・学習理論によりそのとらえられかたが異なる。構造主義言語学および行動心理学の立場からは、「刺激・反対」技法により、「刺激」として与えられた語や文型が、「反応」としてどのように作り出されているのかにより、獲得されたスキルを判断する。それでは、変形生成文法ではどのように考えるのであろうか。以下、変形生成文法の立場からスキルを獲得するという点について検討することにする。

### III 変形生成文法におけるスキルの獲得とは

まず、変形生成文法の背景にある基本的な考えかたを示すことから始めることにしよう。その創始者、N. チョムスキー (Noam Chomsky) は、*Cartesian Linguistics* (1966 : 3) で、デカルトの言語についての洞察に言及し、人間の言語について次のように述べている。

...man has unique abilities that cannot be accounted for on purely mechanistic grounds, although, to a very large extent, a mechanistic explanation can be provided for human bodily function and behavior. The essential difference between man and animal is exhibited most clearly by human language, in

particular, by man's ability to form new statements which express new thought and which are appropriate to new situations.

すなわち、人間は動物にはない人間特有の能力をもっている。それは、新しい考え (thought) を表わす新しい言語表現を形成することができること、その場合、その表現を新しい脈絡に適するように形成する能力を意味する。言いかえれば、人間は、オオムのように単に言われたことをまねして言うのではなく、みずから、新しい脈絡に応じて、新しい発話を創り出すことができるということ、そして、これは動物には決してできないことであるということ、たとえば、オオムは、教えられた発話を完全に発することができるが、みずから発話を創り出すことはできない。一方、人間は、不完全な発話を創り出すことがあるとしても、自分の考えを自分で表わすために語をつなぎあわせることができる。さらに言いかえれば、オオムは語を発することはできて、話すことはできないということである。

これは、人間がことばを創り出すことができるということがいかに驚くべき人間特有の能力であるのかを指摘していることになる。それでは、このような人間の生得の言語能力に配慮した外国語教育とはどのようなものになるのであろうか。次に示す B. Spolsky (1980 : 32) は、「一つの言語を知っているということ」についての変形生成文法と構造主義言語学の考えかたの違いを示し、変形生成文法の観点からは、創造性 (creativity) を重視するということを示している。

Knowing a language involves knowing the items that make up the language, but it also involves being able to supply these items, when they are missing, or being able to do without them. Even were we able to list all the items, we could not show that any one of them is necessary to knowledge of the language.

一つの言語を知っているということは、単にその言語を構成する単語や構文を知っているというだけではなく、それらの項目が抜けているとき、それらを補なうことができることを含意するというのである。つまり、文の中の一部分が抜けているとき、その部分を補なうことができるということは、言いかえれば、その言語を創り出す能力があることを意味する。前述の習慣形成技法による外国語教育では、項目をどれだけ憶えたのかということに重点がおかれるが、抜けているところを補なう能力については視野に入らない。

変形生成文法では、人間は有限の数の規則を使って、無限の文を生み出すという考えかたをする。人間が発する発話は、一回一回新しく生成されたものであると考える。有限の数の規則は、それぞれの言語について、その言語の正しい文が生成されるように規定されなければならない。そして、変形生成文法家たちの仕事は、その言語の正しい文を生み出す有限の数の規則の最もよい形式を見つけることであり、その有限の数の規則が、その言語の文法である。つまり、その文法 (規則) がその言語の文を生成することになる。すなわち、人間が文を生み出すことができるということは、その文法 (規則) を内在しているからであると考えるのである。これを、外国語教育の立場に置きかえれば、学習者に、その言語をつくり出せるように教えるということは、その言語の文法 (規則) を内在化させるように指導するということの意味する。次に示す B. Spolsky (1980 : 34) は、この考え

かたをさらに裏づけるであろう。

The creative aspect of language is one of the cornerstones of the argument for transformational grammar. Only such a grammar has available the “technical device for expressing a system of recursive process”, and only with such devices can the creative aspect be formulated explicitly. The only way to handle the fact that language has an infinite set of sentences and that it is used by people with a finite time for learning, is to postulate a system of rules. The task of the grammarian is to find the best statement of the form of these rules. Knowing a language is a matter of having mastered these (as yet incompletely specified) rules; the ability to handle new sentences is evidence of knowing the rules that are needed to generate them.

スポルスキー(B. Spolsky)は、変形生成文法は言語の創造性を明示的に規定できる仕組みをもつ唯一の文法であると述べ、われわれが、ある言語を知っているということは、その言語の規則を習得したということ、すなわち、新しい文をつくり出すことができるということはそれらの新しい文を生成するために必要とされる規則を内在化しているということの証拠であると述べている。これは、変形生成文法が、文法(規則)が言語の核であるということを教師に強く意識させることになったことを指摘していることになるであろう。言い換えれば、規則の集合が内在化されていなければ、人は言語を理解することも、使うこともできないということ、すなわち、言語は規則に支配された行為(rule-governed behavior)であるということになる。

このような変形生成文法の考えかたは、1970年代当初、アメリカの言語教師に新しい期待をもたせることになったと W. Rivers(1972: 49-50)では次のように述べている。

In the past, many teachers have uncritically adopted habit-formation techniques because language, it appeared, was “a set of habits”. Now many are ready to seize upon a new slogan and begin to inculcate rules in the hope of establishing “rule-governed behavior”, even though they have only a vague concept of what this phrase can mean as it has been used by linguists or psychologists. In this way they hope to take their students beyond the arid fields of mechanical repetition, where pure habit-formation techniques seem so often to have left them, into the greener pastures of creative production of foreign-language utterances.

言語は規則に支配された行為(rule-governed behavior)であるという考えかたは、それまで、言語は習慣の集合(a set of habits)であると考えられていたために用いられていた習慣形成技法(habit-formation techniques)の限界に気づいていた多くの言語教師に、学習者を、機械的な繰り返しの不毛の領域を越えて、その外国語の発話を創り出すというより豊かな成果へ導けるという期待をいだかせることになったという。これは、それまでの機械的な習慣形成技法では、学習者がみずから発話をつくり出すということが視野に入っていなかったことによるものである。



#### IV. 言語教師のなすべき仕事とは

言語は規則に支配された行為 (rule-governed behavior) であるという考えかたに基づいて外国語教育を考えると、教師が学習者のためにしなければならない仕事ははっきりと見えてくる。ここでは、教師のなすべき仕事について、W. Rivers (1972) に基づいて検討を加えることにする。次に示す Rivers (1972 : 51) は、チョムスキーの立場から考えた言語教師の学習者のためになすべき仕事を明確に表わしている。

In conformity with Chomsky's position, we need to make it possible for the foreign-language learner to internalize a system of rules that can generate an infinite number of grammatical sentences that will be comprehensible and acceptable when uttered with the semantic and phonological components appropriate to specific communication situations.

すなわち、言語教師の仕事は、特定の発話の場面で受け入れられる文法的な文を無限に生成する規則の体系 (a system of rules) を学習者に内在化させることである。そして、学習者が規則の体系を内在化すること (to internalize a system of rules) は、次のような状態であると考えられると述べている。

He (N. Chomsky) is referring to the fact that once the system of rules of the language has become an integral part of the student's store of knowledge he will be able to produce, to suite his purposes, an infinite variety of language sequences, whether he has previously heard such sequences or not, and these sequences will be grammatically acceptable, and therefore comprehensible, to the person to whom he is speaking. ( )内は筆者追加 Wilga Rivers (1972 : 52)

すなわち、ある言語の規則の体系をいったん内在化すれば、前に聞いたことがある・なしにかかわらず、その言語の無限の多様な文を創り出すことができ、それらの文は文法的に受け入れられ、したがって、話しかけている人に理解されるものであるというのである。

言語が規則に支配された行為であるということは、新しい文を創るということが、有限の数の規則、つまり、限られた枠組みの中で行われるものであるということであり、話し手が自由に規則を作ることはできないということを意味する。言い換えれば、新しい発話をつくるということは、その限られた規則の中で行われ、その限られた規則を内在化することにより、その限られた規則を無限に使うことを意味する。そして、この考えかたを外国語の学習に当てはめてみると次のようになる。

Creative and innovative use of language still takes place within a restricted framework, a finite set of formal arrangements to which the speaker's utterances must conform if he is to be comprehended and thus to communicate effectively. The speaker cannot "create" the grammar of the language. His innovative ability will exist only to the degree that underlying competence exists---that the set of rules has been internalized. Foreign-language students must acquire the grammar of the foreign language so that it functions for them as does the grammar of their native language. Wilga Rivers (1972 : 52)

すなわち、外国語の学習において、新しく文を生み出すことのできる能力は、学習している外国語の文法(規則)の体系(または集合)が内在化しているだけ存在するということがある。したがって、外国語学習は、学習している外国語の文法(規則)を習得しなければならないということになる。それでは、外国語の文法(規則)を内在化するためにわれわれ学習者は何をしなければならないのかということが次の問題であるが、Rivers (1972: 55-56) も述べているように、文法(規則)を内在化するまで集中的に練習する以外に方法はない。

Intensive practice is essential and must be continued until it is evident that the student has internalized the underlying rule so effectively that it governs his production without conscious and deliberate application of the rule on his part.  
Wilga Rivers (1972: 55-56)

ここで、英語教師のなすべき仕事についてまとめることにしよう。英語が使えるということは、変形生成文法の観点から言えば、英語の文法(規則)を内在化していることを意味する。そして、英語が使えるように教えるということ、あるいは、使える英語を教えるということは、英語の文法(規則)が内在化するように訓練することである。すなわち、学習者に、英語の文法(規則)を内在化させるようにさせることができなければならないことを意味する。これは、前述のユネスコの会議でまとめられた現代語教育の一般原則の(5)で示された「言語教育は、言語形成についての情報を提供するのではなく、学習者に学習者自身のスキルを伸ばさせることができなければならない」ということと同じことを述べていることになる。

## V. ま と め

以上、変形生成文法の立場から、英語学習におけるスキルの獲得とはどのように説明されるのかをみてきた。英語のスキルを獲得するということが、変形生成文法の考えかたによれば、英語の文法(規則)を内在化するということである。学習者は英語の文法(規則)を内在化するまで集中的に練習しなければならないことになる。そして、教師は、学習者が効率よく英語の文法(規則)を内在化するようにその練習方法に工夫が求められることになる。

しかしながら、変形生成文法は、構造主義言語学が言語教育に残したパタンプラクティスのような目だった技法も指導法も示してはいないことに気づくであろう。変形生成文法は、むしろ、言語教師に、構造主義言語学や行動心理学が示すことのできない部分に目を向けさせることに成功しているということが出来るであろう。それは、学習者が新しく学習する言語を内在化してゆく過程に目を向けさせてくれるからである。たとえば、学習者が発した発話に誤りがあれば、その誤りを手がかりとして、学習者の習得状況を判断し、次にどのように指導すべきかを考える資料にする。学習者の間違いを否定的に処理するのではなく、むしろ、積極的に内在化へ導く指導の資料として利用するのである。このような変形生成文法の立場からの言語教育へのアプローチを“a mentalist view”として、構造言語学および行動心理学の立場からの“the Behaviorist view”と区別している。日本の英語科教育においてオーラルコミュニケーションが重視されるようになった現在、英

語教師はこの二つの視点から、英語の文法(規則)が内在化するように、平面的ではなく、立体的に指導法を工夫することが求められていることになる。

### References

- Chomsky, Noam. 1966. *Cartesian Linguistics*. New York and London : Harper & Row.
- Dixson, J. Robert. 1975. *Practical Guide to the Teaching of English as a Foreign Language*. New Edition. New York : Regents Publishing Company.
- Ellis, Rod. 1985. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Rivers, Wilga. 1972. "Rules, Patterns and Creativity in Language Learning", in Kenneth Croft (ed.). *Readings on English as a Second Language : For Teachers and Teacher Trainees*. Cambridge, Massachusetts : Winthrop Publishers, Inc.
- Spolsky, Bernard. 1980. "What Does It Mean to Know a Language?", in Kenneth Croft (ed.). *Readings on English as a Second Language : For Teachers and Teacher Trainees*. Second Edition. Cambridge, Massachusetts : Winthrop Publisher Inc.

\* 本稿は、1991年9月29日に開催された長崎大学英語教育研究会において、「使える英語を教えるということ」という題目で口頭発表されたものを加筆修正したものである。